

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	③
<p>調査先機関: チュラロンコン大学心理学部・研究科 Language and Cognition Lab 国名・都市名: タイ・バンコク 具体的な活動: チュラロンコン大学心理学部・研究科の見学, Suphasiree Chantavarin 博士との学術交流, タイ語の言語習得研究の現状を調べる 活動期間および活動頻度: 2025年5月30日 調査先の概要: チュラロンコン大学 (Chulalongkorn University) は、タイ王国の首都バンコク市内に位置する国立総合大学で、1917年に設立された。2025年のQS世界大学ランキングでは229位、タイ国内では第1位にランクされている。また、Times Higher Education (THE) 世界大学ランキングでもタイ国内1位を維持している¹。 当該学部・研究科は認知心理学、発達心理学、社会心理学および組織心理学という四つの主要な領域からなっている²。当該学部・研究科は毎年バンコクにて Thailand International Conference on Psychology という国際学会を主催しており、特に東南アジアの心理学研究者の間に影響力を持っている。また、当該学部・研究科には東洋・西洋の心理学比較研究に特化した The East-West Psychological Science Research Center が設置されており、異文化と心理学の交差点に関わる幅広い心理学研究のテーマを取り扱っている。このほか、精神疾患・加齢・ヘルスケアにおけるリソースへのアクセスの不均衡を認知心理学・ニューロサイコロジーの視点から研究する Clinical Cognitive Science Lab と、人間のウェルビーイングにおけるマインドフルネスの役割を研究する Insight Based Mindfulness Research Group や、タイ文化の文脈における心理的時間観念の発達の過程を研究する Life Transitions and Psychology of Time Research Group を有している。当該学部・研究科は2023年から英語による学士・修士・博士プログラムを発足し、国際的人材の受け入れおよび発信を強化している。 今回の調査は当該学部・研究科にて言語と認知の研究をされている Suphasiree Chantavarin 博士との連絡を通じて実現したものである。Chantavarin 博士は2021年にカリフォルニア大学デイビス校から心理学の博士号を取得され、その後チュラロンコン大学に移り、現在、認知心理学領域の領域長のお勤めである。博士は言語心理学(文の理解、談話理解、読解、眼球追跡)、応用言語心理学(教育場面での応用、第二言語学習)、言語と認知の発達、言語と感情処理という四つのテーマを中心に、Language and Cognition Lab³を運営している新鋭な研究者である。Chantavarin 博士は積極的に国際共同研究を行っており、現時点では、二人の海外研究者とそれぞれタイ語の読解メカニズムの解明とタイ語の語彙判断テストを開発している。</p> <p>1 https://www.chula.ac.th/en/university-rankings/?utm_source=chatgpt.com 2025年5月18日最終閲覧 2 https://www.psy.chula.ac.th/en/research/research-centers-and-groups 2025年5月18日最終閲覧 3 https://www.nenelab.com/the-lab</p>	

(注) ① 年月日は西暦で記入してください。
 ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
 ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
 ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究開発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

【今回の学術活動で計画した目的】

Suphasiree Chantavarin 博士との意見交換と研究交流は、5月30日に、バンコク市内にあるチュラロンコン大学心理学部にて行なった。今回の学術活動は主に、a) これまで行なってきた宋の研究（中国語学習児における動詞学習）に対して議論・意見をいただくこと；b) 宋の研究テーマに関心を持っていただき国際共同研究を行うための土台を作ること；c) タイ語に関する言語心理学研究の現状を知ることの3点を目的としていた。



【今回の学術活動の成果】

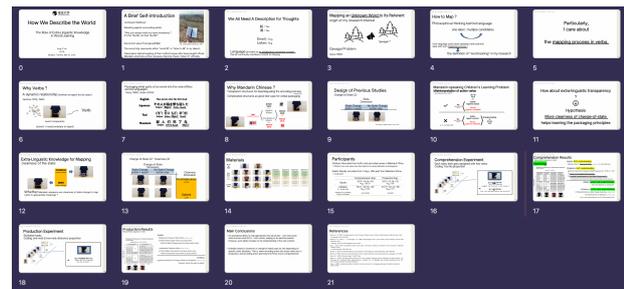
今回の学術活動の成果は、上記の目的に沿って報告する。

a) 自身の研究発表をめぐる議論

中国語を母語とする子どもたちを対象とした宋自身の研究に対して、Chantavarin 博士から主に以下の6点のコメントをいただいた。これらのコメントはいずれも重要なところであり、これまで宋自身がはっきり言語化できていかなかった点はもちろん、これから実施する新しい研究と研究の方向性についても意見いただけて、今後の研究へのより深い理解と思考につながった。



[1] 実験刺激として作られた一部の no-state-change 事象（例えば、ボールがボックスへと向かって投げられたが空中に止まっている視覚刺激）がそもそも不自然に見え、特に子どもの事象の理解に影響を与えてしまっていたかもしれない。すなわち、動作動詞(action verbs)における間違っただけの回答（少なくとも一部）がこの不自然さによって引き起こされたかもしれない。これらの刺激を踏まえて、実験で提示された事象を子どもがどう見ているのかのオンラインデータがあったらよかった。



[2] 異なるタイプの事象を「clearness もしくは endstate salience」にまとめた理論的根拠が提示されていないため、むしろ直接 physical type と locational type として命名した方が良いかもしれない。

[3] 分析では3～6歳の子どもを全体として扱う手法以外に、年齢別の分析もしてみてもどうか。投稿時に査読者からこんな疑問が来るかもしれない。

[4] 動作動詞における中国語児の理解問題は、これからナチュラルな動作のみの場面の刺激を作成し使用することによって検討できるかもしれない。

[5] 異なるタイプの事象による言語獲得への影響をより詳細に調べて、博士課程の研究を通じて状態変化事象における動詞学習の基準的な反応を確立する方針 (norming) を立てることの提案。

[6] 将来 pragmatic cues の影響を検討するには、状態変化事象における語用的情報が何かを考えるべき。

b) 共同研究の土台づくり

Chantavarin 博士は私自身の研究に興味を示してくださった。博士が主にタイ語を母語とする成人を対象に、実験的手法とアイトラッキングやfMRIを用いてタイ語の文の理解の研究に従事されている。共同研究を進める場合、成人参加者の募集とそのデータの分析にご協力をいただける可能性があると感じた。なお、博士自身は現在、子ども参加者へのアクセスはお持ちでないとの話であったが、同大学人文学部の言語学部門で子どもの母語習得研究に取り組んでいる Theeraporn Ratitankul 准教授についての情報も提供してくださった。こちらの研究者の情報の入手も一つの成果だと考えている。今後 Ratitankul 准教授と連絡をとるなどして共同研究の可能性を探っていきたい。

c) タイ語に関する言語心理学研究の現状

この点については時間の都合で詳しく伺うことができなかったが、タイを拠点とする Chantavarin 博士と Ratitankul 准教授のような研究者の存在を知ることができたのは大きな収穫だった。今後は、これらの研究者の研究論文を通じてタイ語における習得研究の動向を把握するための入り口が得られたと言える。

d) 国際共同研究を目指すための学術交流の実体験の獲得

今回、私は初めて、日本と中国以外の海外研究者と自身の研究に関連して連絡を取り、対面でお話を伺う機会を得た。このような実体験は、今後、国際的な研究リーダーとして成長していく上で、非常に貴重な経験であると考えている。この経験を通じて、国際共同研究の実施に向けた具体的な一歩を踏み出すためのエンパワーメントを得ることができた。